

## 一喜一憂しない

大本山總持寺布教教化部出版室長 蔵重 宏昭

数年前の秋、テレビの情報番組でインタビューを受けたことがあります。本山境内のある仏像についての紹介が目的でした。放送当日の午前中に境内某所で取材クルーと待ち合わせました。現れたのは数名の男性スタッフとマイクを持った女性レポーター。女性レポーターはテレビ映りを考慮した、目にも鮮やかな衣装とメイクの装い。レポーターの丁寧な挨拶ののち、すぐさま収録に入りました。テキパキと段取りをされる彼女の緻密で親切な働きは今でも印象に残っています。いざ本番、私とレポーターが横並びの状態でカメラがまわり無事収録は終わりました。帰り際、彼女からまたも丁寧な挨拶をされ一行は帰路に。

その日の午後、秘かに楽しみにしながら実際の放送を視た時まず驚きました。画面一杯に私の上半身が大写し、非常にこそばゆさを感じながらあることに気づきました。それは、あれだけ甲斐甲斐しく動かれていた女性レポーターの姿が全く映っていなかったことに。インタビューの声すらカットされていました。

テレビ用に容姿を整えられ誠実に務めを果たされていたのに、結局一度も映りませんでした。放送後何とも言えない申し訳なさを感じたことでした。レポーターをなりわいとしているとはいえ、テレビの世界は厳しいものだ、さぞ気分を損ねているだろう、と私なりに勝手に同情した覚えがあります。

その後数年してとある記事が目にとまりました。それはそのレポーターがご結婚なさったという記事。そしてそれまで情報番組で主力レポーターとして確固たる地位を築かれていた、ということも紹介されていました。

私がかつて勝手に同情していたことはお門違いであったことにそのとき気づきました。

結果に一喜一憂し感情に流されることなく「ただひたすら」につとめられていたからこそその評価であることがその記事の文字間から読み取れました。

修行道場では、仏道修行とは「只管」つまり「ただひたすら」に打ち込むこと、と口酸っぱく注意されます。裏を返せば、油断するとたちまち「一喜一憂」の感情に流される私たちであるから。

当時と同様の秋風に吹かれこうした思い出がふと甦りました。私自身「しっかり」と叱咤されているかのようでありました。